

## ～徳を高めあう～

「徳のある人」と言われるとあなたは誰を想像しますか。辞書で調べると「思慮」ということが出てきます。よく考えて行動することが「徳」につながるのです。あなたには徳がありますか。(ローマ15：1～)「徳才両立を以って人財となす」徳があれば繁栄(金儲け)する、これが日本の価値観です。しかし私たちは一時の徳(得)を得ようとするために失っていることがあります。今、少し損してでも考えたり認めたりしておけばよかったのに先延ばししたためにもっと大きな問題になった、そんなことはないでしょうか。「才と徳は財を築くためにあるもの」これが日本の価値観であり、「財」が抜けるとなんの意味もなくなります。しかし聖書で言う徳の概念は少し違います。よい徳をもっていても一人ではだめだし、お互いの徳を消しあうようでは意味がありません。逆に徳をもってその徳が一つになれば素晴らしい影響力があります。「一つになる」ということが聖書の概念にはあるのです。聖書でいう「徳」とは思慮深さ、良い、有能、幸福、善のことをいいます。人は誰でも最初は、いいことをしている時に「いいことだ」悪いことをしている時に「悪いことだ」と言われるから善悪の区別がつくようになります。だから聖書でいう「徳を高める」の「高める」とは「建物」で指します。だから「徳を高める」とは、「良い、有能、幸福、善」を「建てる」ことを言うのです。そして「徳」は最終的には「賛美(テヒラ)」につながるのです。(ルカ16：1～)「この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。」(ルカ16：8)ここに出てくる「抜け目なく」これも「徳」なのです。この徳は「思慮深い」ということをさしています。この箇所に出てくる取税人は悪いことをしたが、その悪いときに投げ出さずによく考え思慮深くしっかりしていた、この部分を「徳」だと言っているのです。「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。」(Ⅱテモテ1：7)聖書の「徳」を訳すと「力と愛と慎み」になります。ここで出てくる「力」とは「能力」ということではありません。だから「力のないもの」(ローマ)とは能力がないということではなく、信仰によって行うことができない、つまり、思慮深く考えられず行き当たりばったりの行動をしてしまうということなのです。そして「慎み」とは自らを見つめてあてはまるかどうかを考えることです。あなたの周りに力のない人がいるでしょうか。聖書ではこの「力のない人」を助けることが「徳」であると言っているのです。誰でも自分を喜ばせるようなことをせず、その人の弱さを担って徳を高めあう、その結果1つになって「徳」になる(徳の集合体)と言っているのです。つまりお互いが潰し合ったり、自らの利益のための「徳」ではなく、一つになることを通して大きな力になり神の御業が起こる、だから最終的にテヒラ(神への賛美)になるのです。全ての人が徳を持つべきです。しかし思慮深く考えられない人がいるなら思慮深く考えられる人が、抜け目なくできるように導いてあげる、それが「教会の建て上げ」なのです。教会は徳を高めなくてははいけません。あなたの目線を変えて、来ていない人がいるときに、「だめだ」というのではなく、歩めない、その力のなさを担うべきだと聖書は言っているのです。イエス様は私たちの力のなさを担ってくださいました。(ローマ15：1～7)徳を負い合えば一つになり力があります。神様はあなたに1つの大きなインパクトのある行動をしたいのです。しかしそれはあなた一人の力ではできません。だからあなたの周りに弱って力のない人がいないかどうか考えてください。私たちは人をよくするためではなく否定するために「アラ」を探してしまいます。しかし、人を指差すのであればその人の徳を高めるために指ささなくてははいけません。「この人にはこんなところがある。でもこの部分がよくなれば、もっとよくなるから言ってあげよう。」徳を高めるためには悪いところの前によいところを見る必要があります。良いところがあるから悪いところを取ってあげようと思うのです。私たちの見方を変える必要があります。一つのを建てるために①**担い合う**。あなたは何かを担っていますか。その人を指差すのであればその人の弱さを担うべきです。あなたが担われているからです。そこで初めてその人はあなたに心を開くことができます。中傷では聞けません。担い合うことがとても大切です。信仰によって歩めない人の弱さを負ってください。②**希望をもつ(保つ)**希望を持つだけでなく保ってください。「もう無理」と言わず最後まで希望を持つべきです。神様があなたの罪や弱さを知っていても希望を持ち続け、あきらめないからです。それは人に対しても自分に対してもです。(使3：1～16)足なえの人はペテロたちを見て「何かくれそうだ」とわかった、これが「徳」です。「あの人のところにいけば何とかしてもらえる」あなたにはこれがありますか。あなたの姿からイエス・キリストを見せる、これが香りを放つということです。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう」(使3：6)ペテロたちは足なえの人が良くなったときの希望を持ち、彼の痛みを負ってあげました。その結果、癒された足なえの人の姿を見たたくさんの人が救われ最終的に神を賛美しました。そしてこれが「徳」なのです。その場しのぎの助けでなくその人が生涯にわたって何が必要なのか考えて本当にその人のために犠牲を払わなくてははいけません。その結果、あなたとその人の間に太いものを与え、インパクトになります。あきらめてはいけません。③**光り輝く**。「声を合わせて」(ローマ15：6)これが「光り輝く」なのです。あなたは一人では輝けません。あなたが負ってあげた人が輝くことを通してあなたが輝くのです。「自分が」といっている人は一生輝けません。日本的な徳にはある「名声」は聖書の徳にはありません。聖書では一人の人が高くあげられることを望まれていません。教会は複数の人が集まり一つになることで完全になるのです。「二人三人、我が名によって集まる場所に私も共にいる」そこに神の栄光が輝くのです。お互いがお互いにやりあうことで喜びが得られるのです。自らの易のためでなく光り輝いていかななくてははいけません。一人では輝けません。負いあい、相手に希望を持ち続けることで相手が輝けるのです。教会は得を高めるところであり、それはいいことばかりを言うことではありません。その人が乗り越えられない問題を共に乗り越えてあげる、これがクリスチャンであるあなたがすることです。これが名声によらない愛による「徳」です。本来の徳は愛からすることです。共に生かされるということを考えてください。受けたいためにやるのではなく、相手のために何かできるかを考えるから愛し合えるのです。あなたの「徳」の概念をかえてください。相手のために自らを損してでも相手の「徳」を考えてあげることが最終的にあなたに「徳」が返ってくる方法です。今日から新しい「徳」の概念を持ち、一人ではなく、あなたの周りの人と共に輝いていきましょう。(要約者：岩崎祥誉)